

大井川中流域における観光資源の実態とその活用実践

——川根本町エコツーリズムネットワークの活動を中心として——

安 福 恵美子
天 野 景 太

1 本論文の研究関心

本論は、静岡県の中部を縦断する大井川の流域、特にその中流域に位置する静岡県榛原郡川根本町における観光資源の実態に関して整理するとともに、その活用実践の現状と可能性に関して、流域観光という視点において検討するものである。

なお、ここでいう「観光資源」とは、同地域を対象とした着地形観光において観光対象となりうるものに限定して論じる。また、ここでいう「観光実践」とは、同地域を対象とした着地形観光における観光者への観光資源のプロデュースのあり方に限定して論じる。さらに、ここでいう「流域観光」とは、単に「流域における観光」という意味ではなく、「流域に点在し、その存在が河川と深い関わりをもつものであり、また河川を媒介としながら相互にゆるやかに関連しあう観光資源群を対象とした観光」といった含意をもたせている。

川根本町は静岡県の中央部に位置し、東京や名古屋などの大消費地につながる東海道線や東名高速道路からのアクセスも良く、また富士山静岡空港からも近い、大井川の流れを中央に抱く山間の農村である。南北に走る大井川鉄道走る蒸気機関車と軽便鉄道である井川線、及び大井川の支流である寸又川の畔に位置する寸又峡温泉が主たる観光対象となっており、多くの旅番組や旅行ガイドブックにおいてはこの2つがクローズアップされる。東海道線から大井川鉄道で北上し、寸又峡温泉で一泊するのが「定番」の観光ルートとして紹介されたり、蒸気機関車の乗車のみを目的とした首都圏等からの日帰りツアーも商品化されている。しかしながらそれでは、当地の地域的魅力が十分に織り込まれ、活用された観光実践とはいえない。地域が主体となった継続的な観光実践、及び観光を媒介とした（地域と観光者との）コミュニケーションを含んだ着地型の観光振興を見据えるなら、既存の新たな観光資源の掘り起こしとそれらを活用したユニークな観光実践の取り組みが望まれる。

そこで提起されるのが「流域観光」というコンセプトである。この地域の産業、社会、文化等は、大井川との深い関わりの中でその歴史が紡がれてきた。この意味で、潜在的に観光対象への昇華可能性を秘めた地域資源の多くは、自然的資源、人工的資源を問わず、河川と何らかの形で関わりを持つものである。本論では、河川との関わりという視点から地域の観光資源を位置づけ、それらを活用した観光実践の可能性に関する見通しを展望することにした。

まず第2節では、河川が流域の地域の産業・文化などに果たす役割に関して概観した上で、その

機能によって発展してきた大井川中流域の産業と文化に関して概観する。続く第3節では、前節での考察を受け、この地域に点在する観光資源に関して整理する。第4節では、地域住民の有志によって構成されている川根本町エコツーリズムネットワークの観光実践活動の特色に関して検討する。川根本町エコツーリズムネットワークは、2009年より本格的な活動を開始した川根本町における着地型観光の提供主体である。この意味で彼らの活動は、本論の研究関心と問題意識を共有している。第5節において、これまでの考察を受け、今後の大井川中流域における観光資源の活用実践の可能性に関して展望する。

2 河川の地域に果たす役割と大井川中流域の産業と文化

まずは、河川と流域地域の産業、文化とのかかわりについて概観し、大井川中流域におけるそのあり方に関して考察しておきたい。河川が地域の地場産業や文化、社会の発展に果たしてきた役割を、以下の三点に求められるだろう。

第一に、河川がもたらす自然の恩恵を享受することによる生活、産業の発展である。飲料水、洗濯といった個々人の生活のレベルから、灌漑・水力発電と行った水資源そのものの利用、世界の四大文明が、河川の沿岸で興ったことに象徴されるような、河川がもたらす肥沃な土壌がもたらす農業開発の展開や森林資源の利用までが挙げられる。

大井川流域にあつては、林業と電源開発という2つが、地域の産業や生活を考えるキーワードである。まず林業は、近世～近代を通じて、この地域の基幹産業であった。日本の林業地域では「木材生産の山仕事は、キリ（伐採）とダシ（出材）に大別され」ており、高度な職人技を持ったそれぞれの技能集団が集落を形成し、技能の継承・再生産がなされていた（北尾（1992、p2）。千頭以北の大井川上流部は、このような林業山村が基礎となっており、独自の文化を形成した。現在は多くの日本の多の山間地域と同様、林業は衰退し、所々に間伐がなされた森林は散見されるものの、伐採された木はその場に放置されている場所も多く、荒廃が懸念されている。

また、近代以降、東海紙料（現、東海パルプ）をはじめとする製紙工場が中～下流域の島田に多く立地し、流域で伐採された木材を原料の一部としながら地場産業として定着していった。

次に電源開発であるが、近代以降、豊富な水資源を活用するため、多くの発電用ダムが建設され、現在では日本有数のダムと堰堤の川となっている。大井川の支流を含めると、日英水電小山発電所（1919）、前述の東海紙料の専属発電所である東海紙料地名発電所（1910）に端を発し、東京電力田代ダム（1928）、中部電力千頭、大井川、寸又川、横沢川、大間、境川（以上が戦前に築設）、奥泉、井川、笹間川、畑薙第一、畑薙第二（以上が1950～60年代の築設）、長島（1990年代の築設）と立て続けに築設された。これらの築設により、井川湖、畑薙湖、長島湖、大間湖などの人造湖が誕生している。また、これらのダムからの取水により、かつて豊富な水量を誇った大井川の流れが枯渇し「上流から中流にかけて13の発電ダムが築設され、中流域ではダムからダムへと流水は導水路の中

を送水されるため、ダム下流では河川の流量が少なく、たとえば最下流にある塩郷堰堤からの年間無放流日は、昭和52年から60年までの平均で169日にも及び、この間は河道には雨が降らなければ一滴の水も流れない、“河原砂漠”が現出した」（大内他編、1995、p198-199）。これらは水没集落の問題のみならず、魚の減少、茶の香味の下落、井戸水の枯渇、調整池等の流砂の堆積による河床上昇が引き起こす浸水、下流域での海岸線の後退などのさまざまな環境被害の要因となった。このことが1971年の長島ダム建設計画発表以降、流域自治体の中で社会問題化し、1985年以降、約4年間続いた川根町（現、島田市）、本川根町（現、川根本町）、中川根町（現、川根本町）の住民らによる水返せ運動につながっていく。現在は、かつての水量に遠く及ばないものの、中部電力との間で一定量の放流を行うことに関する協定が結ばれ、一応の決着をみている。

このほか、大井川の水蒸気による川霧の恩恵を利用した川根茶の栽培が、流域を代表する農産物となっている。

河川が地域の地場産業や文化、社会の発展に果たしてきた役割の第二は、人々の往来や地域の交流・文化の伝搬を遮断する役割である。

たとえば大井川の場合、近世においては架橋もなされておらず人足に頼るか自力で渡河するしかなく、「箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川」と称され、東海道中の交通の要衝であった。そのためもあり、河川が伝搬を遮断し 民俗・文化・芸能の境界線となっている（野本、1979、p92）。川根本町においても、大井川の右岸と左岸で、神楽の様式が異なったりしている。

また、このような交通の遮断の影響により、川留によりさまざまな人間が集まり、「さまざまな風俗や文化の種を撒いて」いくことで「特殊な文化が沈殿・醸成され」ていった（野本、1979、p85）。大井川の川越を目前に控え、多くの旅人が滞留した東海道島田宿の遊郭文化に由来し、全国に展開した島田髷と島田の帯などは、島田髷祭りの開催にみられるように現在も地域の観光資源となっている。

河川が地域の地場産業や文化、社会の発展に果たしてきた役割の第三は、河川を利用した交通を介した経済・文化交流の促進である。河川は前述のように、地域と地域をその水流によって分断するが、同時にその水流を介して流域に点在する諸地域を接続する役割も担っている。南アルプスの山間で林業の発展は、大井川を介して下流への運材が可能であったからこそである。大井川森林の出材は、近世以降、川狩と称し、丸太をそのまま川に放流することによって行われ、それは昭和42年まで行われた。また昭和初期（1930～35年）にあつては電源開発の影響によりダムの堰堤が川狩の障害になり始めると、当該箇所にはダム建設用に建設された簡易鉄道が森林鉄道に転用され、また新たに森林鉄道が延伸されるなどして、木材や生活物資の輸送を担った。また、川根電力索道や天地索道など、大規模な山間部の空中輸送手段もいち早く建設され（現在どちらも廃止）、1917年に設立された大井川鉄道とともに、流域の産業の発展と生活を支えきた。1960年代以降は、森林鉄道に代わり、林道が上流域の南アルプスの山間に建設されているが、現在は林業の衰退により廃道化し

たものも多い。

現在の大井川中流域においては、発電を除き、河川の地域に果たす役割は大きく後退してはいるものの、これまでの地域社会・地域文化の形成過程に河川が大きな役割を果たしてきたこと、そしてその遺産が、今もって流域各所に息づいていることにかわりはない。

3 大井川中流域における観光資源の実態

では、大井川中流域の現状を念頭に置きつつ、この地域の観光資源の特色に関して記述していきたい。

自然資源（山岳と森林と茶園）

大井川の中～上流域は、奥大井県立自然公園の内部であり、南アルプスの山間のトレッキングを通じて原生林、人工林、溪谷、動植物などの自然美、峠や山頂からの景観に触れることが可能である。大井川上流域においては、3000メートル級の山岳が聳え、ビバークを伴う登山の範疇であるが、川根本町において、特に、大井川鉄道下泉駅から接叡峡温泉駅にかけては、大札山、山犬段、板取山、沢口山など、登山道がよく整備された1500メートル級の山岳に囲まれており、最寄り駅から徒歩やマイクロバスでのアクセスにより、日帰りを想定したトレッキングが可能である。東海道線から30キロ程度の場所において、南アルプスの2000メートル級の山岳群と駿河湾を一望できる立地は、他の地域にはない観光的魅力であるといえる。



天水（沢口山山頂付近）からの眺望



大札山山頂からの眺望

また、大井川鉄道の車窓からは茶畑が広がっている。農林水産大臣賞を受賞した、つちや農園などが栽培する川根茶はブランド価値をもっており、全国へ直販を行っている農家も多い。現在、茶園の景観それ自体が観光資源としては確立していないものの、川根茶の味のイメージと、川霧に囲まれた山間の茶園の景観とを重ね合わせることを通じた観光経験の提供も考えられる。

ダム・人造湖と産業遺産

流域に点在するダムと堰堤、及び電力開発に関連する産業遺産群は、この地域の地理を象徴する建造物であると同時に、それゆえに、有力な観光資源であるともいえる。大井川中流域に位置するダムは、下流側から塩郷堰堤、大井川ダム、長島ダム、井川ダムであり、いずれも大井川鉄道の車窓から確認可能である。このうち1990年代に築造された長島ダムは、国土交通省の直轄管理で地域に開かれたダムを標榜していること、大井川鉄道の長島ダム駅直下にあること、ダムを見渡せる公園や資料館が整備されていることなどから、見学ツアーも組まれるなど観光対象となっているが、他のダムの外観や放流の観察を含めて、流域の電力開発史と関連させることによる観光経験の提供可能性が考えられる。また、ダム建設により発生した人造湖として、長島湖、支流の寸又川に位置する大間ダム湖などがあり、峡谷に挟まれた湖面の景観をつくっている。

なお、昭和初期に築造されたダムも現役で稼働中であり、この意味で21世紀になって完成した長島ダムに至る100年の建築の変遷を、一つの川の流域で巡ることができるが、大井川の電力開発のルーツの一つである東海紙料地名発電所（1961年廃止）の建物が、近年まで残存しており、外観が見物できた他、内部でのイベント開催などの可能性も考えられたが、残念ながら2010年に解体が決定した。



チンダル湖としてエメラルド色の湖面をたたえる大間ダム湖



解体前の東海紙料地名発電所

輸送・交通に関する産業遺産

木材輸送を担った川狩が廃止されてから久しく、その名残をとどめる遺構は残っていないものの、大井川鉄道接岨峡温泉駅付近に立地する川根本町資料館やまびこ内に、木材ダムともいえる鉄砲堰の復元模型が展示されている。

また、この地域の物資輸送の近代化を最初に担った川根電力索道（1938年廃止）の遺構を見つけることは難しいが、大井川鉄道地名駅付近の鉄道と索道との交差点に、索道から鉄道への落下物防止シェルターが現存しており、蒸気機関車列車に乗車すると、専務車掌のガイドに「日本一短いトンネル」として登場する。昭和初期から昭和40年代初頭にかけて、木材輸送の主力を担った千頭森林鉄道の遺構の多くは道路に転用されていたり、そうでない場所は山間部の斜面であるがゆえに崩壊が進みアクセスが困難であるが、アーチ鉄橋の飛龍橋をハイライトとする寸又峡温泉から大間

ダム湖に至る部分はウォーキングコースに転用されており、観光対象化している。

現役の鉄道である大井川鉄道は、蒸気機関車が定期的に走行する大井川本線（金谷～千頭）と、軽便鉄道である井川線（千頭～井川）からなる。大井川鉄道は、旅行の移動手段であった鉄道を観光対象として売り出した先駆的な鉄道事業者であるが、前者は旧国鉄の蒸気機関車を譲受して牽引する列車を運行し、蒸気機関車との邂逅のみならず、旧型の客車への乗車体験、専務車掌の接客、車窓風景などをパッケージとして観光対象化されている。後者は井川ダム建設・管理のための資材輸送を主たる目的とした（する）軽便鉄道であるが、全国的に珍しい小柄な車体の列車や、アプト式鉄道という急勾配を登る鉄道システムそれ自体が観光対象となっている。また、山間の大井川に沿って建設された列車であるので、関の沢鉄橋からの眺望をはじめとする車窓風景も観光資源化されている。また、長島ダム建設に伴い川根市代～接岨峡温泉間の路線が付け替えられたが、長島ダム駅付近など、水没しなかった区間は、その廃線敷を歩くことができる。



川根本町やまびこ館の鉄砲堰の模型



寸又峡温泉内の千頭森林鉄道の保存客車

以上、これまで観光対象として注目・活用されてきたものからそうでないものまで、流域の観光資源の実態を概観した。もちろん、ここで取り上げていない観光施設群などは現地に多く所在しているが、本節では流域の社会史に関連の深い資源をピックアップしている。次節では、既存の観光資源や楽しみ方にとらわれない着地型観光の実践・発信を始めた川根本町エコツーリズムネットワークの観光実践に関して見ていくことにしたい。

4 大井川中流域における観光実践～川根本町エコツーリズムネットワークの活動

川根本町エコツーリズムネットワークとは、「川根本町の豊かな自然環境や、自然に育まれた生活文化、歴史などの資源を守るとともに、観光の振興や人々の心の癒しにつながるエコツーリズムの推進を図る」ことを目的として設立された「エコツーリズムを通して、川根本町を元気にしようとする活動者のグループ」（川根本町、2008）である。2008年、川根本町企画観光課、及び川根本町まちづくり観光協会の呼びかけに集まった人々により構成され、川根本町で行われる着地型ツアーのホスト役を担っている。自然環境、歴史文化、癒しと食、情報発信・収集の4部会が設置され、会

員はそれぞれの部会に登録されている。また、2009年11月以降、先進的なエコツーリズム実践活動を実施しているNPO法人に籍を置くK氏が地域コーディネーターとして関わっており、エコツアーの企画・実践に携わっている。以下では同氏が関わって以降に実施された、川根本町エコツーリズムネットワークのメンバーが参加・協力した2つのイベントを活動事例として取り上げる。

森と湖に親しむ旬間 Eボート体験試乗

2010年7月31日実施。長島湖を大型ゴムボートであるEボートを漕いで一周するイベント。奥大井森と湖に親しむ旬間実行委員会主催。地元のカヌー愛好家、川根高校カヌー部のOBの大井川鉄道社員などがホストとなり、オールの使い方のレクチャーや周囲の景観のガイドを行った。大井川鉄道奥大井湖上駅集合・解散で試乗時間は45分程度。道中、湖上を走る井川線列車を眺めたり、井川線の廃線跡付近にも上陸する。Eボートを漕ぐという体験、ダム湖である長島湖を自由に移動する体験、陸上からでは到達が困難な廃線跡を間近で見られる体験など、これまでにない観光資源の活用実践といえる。なお、翌8月1日は、ほぼ同じメンバーにより長島湖でのボート体験と河原でのバーベキューがセットとなったツアーが実施された。



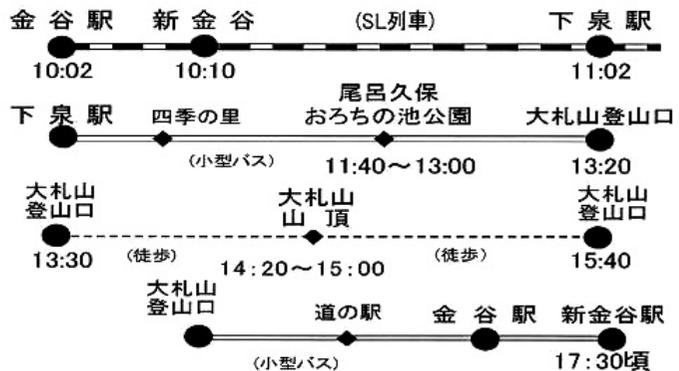
Eボート体験



井川線の廃線跡（トンネル）を見る

大札山紅葉トレッキングモニターツアー

2010年11月3日実施。行程は右表の通りであり、金谷駅、または新金谷駅に集合し、蒸気機関車が牽引する列車で下泉駅まで移動し、マイクロバスで大札山の中腹まで移動、つちや農園のご自宅でエコツーリズムネットワーク会員謹製の弁当で昼食。午後は、地元の山岳ガイドと野鳥愛好家の会員によって、大札



山登山口から山頂までを往復。道の駅川根温泉に立ち寄って、金谷駅・新金谷駅にて解散である。奥大井・南アルプスマウンテンパーク推進協議会が事業主体となり、旅行業者でもある大井川鐵道が企画、実施したモニターツアーである。

日帰りのツアーではあるが、蒸気機関車の乗車体験、1000メートル級の山へのトレッキングと山頂からの眺望、道中での植生ガイド、地元で収穫された食材と川根茶の昼食と、数多くの観光経験が含まれている。



つちや農園宅での昼食会



大札山トレッキング

川根本町エコツーリズムネットワークの活動の評価と地域コーディネーターの役割

川根本町エコツーリズムネットワークが活動をはじめた間もないが、これまで観光資源としてあまり認知されてこなかった地域資源にスポットを当て、Uボート乗車体験に象徴されるような（この地域にとっては）新たなアプローチで観光者にプロデュースしていくようなプロジェクトを継続的に実施するための萌芽がみられていると評価することができるだろう。特に、2009年11月以降、地域コーディネーターとしてK氏が、観光実践に携わるようになったことの影響は大きいのではないかと考えられる。大井川中流域の観光実践におけるK氏の役割として、以下の三点を指摘しておきたい。

第一に、地域の外部の発想による地域資源の再解釈、という役割である。地域の外部の人材であるK氏は、長年水資源を活用した観光実践に関する実績があることから、そのノウハウを川根本町にローカライズすることで、Uボート乗車体験などが実現したわけである。このように、地域の地理・社会的特徴の十分な理解の上に新たな視点からの解釈を施し、ときにはUボートなどの外部のフォーマットを採用することにより観光活性化を仕掛けていく役割が期待できる。

第二に、さまざまな主体間の協働を促進するジョインター、または調整するメディエーターとしての役割である。K氏の場合、自治体（川根本町）の企画観光課、および川根本町まちづくり観光協会を拠点として活動しつつ、行政主体の立場ではないポジションから活動を展開している。それにより、さまざまなアクターの利害関係を相対化し、前述のような新たな視点からの観光実践の企画・実現に対するフットワークが軽くなるといえる。

第三に、エコツーリズムネットワークの会員を中心とした川根本町の住民たちを観光実践の輪の中に巻き込んでいくことによって、地域住民の観光実践に対してのインセンティブをもたらす役割

である。K氏によると、川根本町において（観光実践に限らず、創作活動等を含め）「おもしろいことをやっている人たち」の多くは、外部からの移住してきた人々であるという。しかし、地域の住民にとってはエコツーリズムネットワークの活動を通じて流域に住まう地域住民にとっての日常の世界を素材としながら、観光者に伝えていくような観光コミュニケーションの実践の契機になりうるのではないだろうか、というわけである。

5 大井川中流域における今後の観光実践の可能性

以上、大井川中流域観光資源の実態、及び川根本町エコツーリズムネットワークの活動を中心とした観光実践のあり方を整理・考察してきた。これらを踏まえ、今後の大井川中流域における観光資源の活用実践のあり方に関して展望しておきたい。

そのためのヒントになる論点として、近年、これまであまり注目されてこなかった地域資源を活用した着地型の新しい観光のあり方（ニューツーリズム）に関する議論があり、盛んに議論されるようになってきている。しかしそこでは、「エコツーリズム」「ヘリテージツーリズム」「グリーンツーリズム」「インダストリアルツーリズム」「スタディツーリズム」など、ジャンルごとに文節化されて検討・実践がなされる傾向にある。これらのジャンルを大井川中流域の観光実践に当てはめてみるならば、「エコ～」は南アルプス南部の登山道のトレッキングツアーや野鳥や植物の観察など、「ヘリテージ～」は、大井川鉄道の蒸気機関車体験や川根本町やまびこ館における鉄砲堰の模型の見学、千頭森林鉄道や大井川鉄道井川線旧線の廃線跡観察など、「グリーン～」は川根茶の茶摘み体験と試飲など、「インダストリアル～」は長島ダムの見学や大井川鉄道の駅などのレトロな鉄道施設の見学、「スタディ～」は、水資源開発とその負の影響に関する環境問題の実習や林業の現状を知るツアーの可能性、などが考えられる。

しかし流域観光という視点でこの地域を捉えるなら、あえてジャンルの型にはめてしまわずに、大井川の流域史の物語の中で統一的に捉えていく、すなわち、流域の観光資源を有機的に紡ぎあわせていけるような新しいコンテキストの創造が重要である。流域の山間地域における観光活性化あつては、個々の観光資源が「小粒」であるからこそ、なおさらこのような視点での観光実践が意味を持つのではないだろうか。この意味で、K氏のような地域の外部の視点をもつ地域コーディネーターの存在が、重要な役割を役割を果たしうるのではないだろうか。

謝辞

本論文は2009年度静岡英和学院大学共同研究「流域観光の可能性に関する基礎的研究：静岡県大井川流域を事例として」（研究代表者：天野景太）の成果の一部である。調査の過程でお世話になったNPO法人ホールアース研究所の金丸陽一郎氏、平野達也氏、また山岳ガイドの松本匠氏をはじめとする川根本町の観光関係者の方々に厚く御礼申し上げる。

参考文献

- ◆大井川鐵道編（1955）『大井川鐵道三十年の歩み』大井川鐵道
- ◆大内力・高橋裕・榛村純一編著（1995）『流域の時代：森と川の復権をめざして』ぎょうせい。
- ◆香月靖晴（1990）『遠賀川：流域の文化誌』海鳥社
- ◆川根本町商工観光課（2008）「川根本町エコツーリズムネットワーク会員募集について」
<http://www.town.kawanehon.shizuoka.jp/news/newsview.asp?cd=10&id=743>
- ◆北雄邦伸（1992）『森林環境と流域社会』雄山閣
- ◆佐野正佳（2002）『来てGo！大鉄』静岡新聞社
- ◆Shimneti（2009=2010）「林道・ダム・鉱山の勝手な記録」<http://netishim.seesaa.net/>
- ◆中部電力編（1961）『大井川：その歴史と開発』中部電力
- ◆中部電力編（2001）『大井川：流域の文化と電力』中部電力
- ◆上毛新聞社・埼玉新聞社・下野新聞社・茨城新聞社・千葉日報社編（1997）『利根川322キロの旅：流域の自然とその営みを求めて』上毛新聞社
- ◆白井昭（2007）『大井川鐵道井川線』ネコ・パブリッシング
- ◆新谷融・黒木幹男編著（2006）『流域学事典：人間による川と大地の変貌』北海道大学出版会
- ◆静岡地理教育研究会編（1989）『よみがえれ大井川：その変貌と住民』古今書院
- ◆地方史研究協議会編（1993）『河川をめぐる歴史像：境界と交流』雄山閣
- ◆島田市博物館編（2006）『大井川流域の文化』島田市博物館
- ◆豊田武・藤岡謙二郎・大藤時彦編（1978）『流域をたどる歴史 3（関東編）』ぎょうせい
- ◆野本寛一（1979）『大井川：その風土と文化』静岡新聞社
- ◆平沼義之（2000=2010）「千頭森林鉄道」『山さ行がねが』
<http://yamaiga.com/rail/senzu/main.html>
- ◆松村博（2001）『大井川の橋がなかった理由』創元社
- ◆向一陽（2003）『日本川紀行：流域の人と自然』中央公論新社
- ◆福本繁樹（1994）「パプアニューギニア、セビック河流域と北東内陸部：男性がつくる土器」『季刊民俗学』69、国立民族学博物館、pp26-41
- ◆森瀧健一郎（1997）「水資源の過剰開発とその帰結」『環境社会学研究』3、pp105-109
（なお、本論中に挿入した写真は、すべて筆者（天野）の撮影による）